

第九号
「神の手」

メルマガ noichi 第九号、今月のテーマは『神の手』。他の何にも替え難い、人生で一度切りの出来事。それは偶然なのか、運命なのか、奇跡なのか、それとも：神様のお図らいでしょうか。今回は初登場、noichi 編集長の母君・中島一子さん、ヴァイオリン奏者・原愛美さんをお迎えし、お二人の珠玉の実体験を拝借して、読者のみなさまへお届けさせて頂くことに致しました。

メルマガ noichi、船出してまだ間もないですが、毎回のテーマ探しには一生懸命考えさせられるところで、己の見聞の浅さ、発想の乏しさを思い知る今日この頃…といった具合でございます。しかしながら、思い掛けないところに切り口を見つけて進めてゆく楽しさと、お読み頂く方、ご執筆頂く方とご縁に結ばれる喜びは、冥利に尽きるところでございます。それを励みとして、益々取り組んでいく所存です。

さて、今回のテーマ『神の手』。紐解いていくうちに、私には何となくこの神髄が見えてきたように思います。この『神の手』は、言い換えれば『救いの手』、もう一つ言い換えて『唯一の手』という言葉になりましょうか。

手前味噌ですが、私が生まれた昭和54年は、偉大な曾祖父・中島雅楽之都在が逝去した年に当たり、日数にして僅か七十余日ですが、一緒にこの世にいたことになりました。もちろん記憶には全くありませんが、曾祖父が私を認識してくれたこと、私に触れてくれたであろうことは、紛れもない事実として今日も尚、私の強い支えとなっています。しかしそれは、少なくとも私にとっては神の手というのとは少し違います。神の手と聞いて、私にはピンとくる一人の『手』があります。私が生まれた時その瞬間、私をこの世に引っ張り出して下さった名医・吉元昭治先生の手。先生は東京都小平市に開業しておられる病院の院長で、私が生まれた頃から今日までずっとお世話になっているお医者様で、考えてみると先生に何度助けて頂いたかわかりませんが、御高齢になられた今でも、医務室で、或いはお運び頂いたコンサート会場でも私の手をグッと握って下さり、私を元気づけて下さいます。

そんな、先生の手。『私がこの世で最初に触れてもらった手』は、私にとって世界で一つしかない手、替わりがない大きな手、私の存在の全てを包み込んでもらえる、唯一無二の、それこそまさに、私にとっての『神の手』なのかもしれません。

カザルス先生

正派邦楽会副家元 中島一子

「カザルス先生」のお名前は、私にとつて子供のころからとても親しみがあり、両親の会話にしばしば登場するD・L・レベット（建築家）、H・カウエル（作曲家）、F・カサード（オペラ歌手）さんなどと同様に親しい外国の方の一人だと思っていました。

五、六歳になり、平井康三朗先生のご次男・丈二朗先生にピアノをお習いするのでお伺いするようになると、レッスンスターの壁一面に貼ってあるご長男・丈一朗先生の海外公演のポスターや写真を目にしました。カザルスの御高弟でいらつしやる丈一朗先生をはじめ、先生方と母との会話などにしばしば出てくる「カザルス先生」の名は、実はパプロ・カザルスという世界的なチェリストらしいとやがて知りました。

さらに後になってカタロニアを祖国に持つ偉大な音楽家パプロ・カザルスで「一九七一年にニューヨーク国連本部にて国連平和賞を授与され、カタロニア民謡《鳥の歌》を九十四歳で演奏した」その人であることを知りました。

カザルスの偉業の一つに《バッハ無伴奏チェロ組曲》の発見と、初めての公開演奏があります。私も全六曲を収めた三枚のレコードを繰り返し繰り返し聴き、カザルスの生み出す旋律や呼吸、さらには指板にあたる音や、弓が他弦に触れて出る音までが私の中ではバッハ無伴奏組曲の曲の一部になってしまった程です。

一九六一年、パプロ・カザルスは愛弟子の平井丈一朗先生の帰国演奏会でシューマン作曲のチェロ協奏曲イ単調、ドボルザーク作曲の同口単調他を四月十一日、十二日の二日間、日比谷公会堂のステージで指揮をされました。その在京中に平井先生ご一家と共に正派音楽院をカザルスご夫妻が訪問されました。その際に撮影した初代家元中島雅楽

之都や靖子と膝に抱かれた私ほか、当時の正派音楽院、正道場関係者八十名ほどの記念写真が私のアルバムにあります。

さらにもう一枚、これは来日された日の羽田空港で、三歳の私がカザルス先生に花束を渡しているものです。全く記憶には残っていないのですが、「頭を撫でていただいたよ。」との母の言葉は、偉大なパプロ・カザルスとの奇跡ともいえる接点となった大切な一刻でした。頭を撫でて頂いた御利益（失礼な言い方ですが）があつたかどうか分かりませんが、子供のころから世界中の音楽に興味を持ち、今でも様々なジャンルの素晴らしい音楽に触れる喜びを持ち続けているのは、ひよっとしたら神の手のお力かもしれません。



パプロ・カザルスと中島雅楽之都（中央＝平井丈一朗）

マザー・テレサに抱かれて

ヴァイオリン奏者 原 愛美

生後3ヶ月にして私は人生で最も貴重な経験をさせていただきました。

それは私が生まれた1981年、その年の4月にマザー・テレサが初めて日本に来日した、その時の出来事です。東京カテドラル聖マリア大聖堂に於いて「マザー・テレサと共に捧げるミサ」が4000人の信者と共に行われました。私の家族は、明治初期からキリスト教を信仰しており、私で五代目となります。まだ生まれて間もない私は姉達がお世話になっていた幼稚園の園長先生に抱かれ、一緒にミサへ行くことになりました。

ミサの後、マザー・テレサのお話が終わると、子供達だけがマザーのお側に行くことが許され、乳児の私がお近く歩いていけるはずはなかったのですが、恩師は、思い切つてマザーのところへ向かったそうです。恩師は、私を差し出しました。マザーは、優しく受け取りニッコリと微笑んで頬ずりしてくださいました。いつもとは違う雰囲気にお胸に抱かれ、すぐ泣き止んだそうです。

卒園の時、恩師に頂いた手紙にこうあります。

「あなたは、マザー・テレサに抱っこしていただいたことを覚えていてくださいね。マザーは、おやさしいまなざしでニコニコと赤ちゃんのあなたを抱っこしてください、そのお姿はまるでナザレの田舎のマリアお母さん（イエスキリストの母）のようでした。」

私の貴重な出来事を証明してくれるのは、もうただ一つ、この恩師の手紙しかありません。多くの方々との時を共有し、当時は沢山の報道もされましたので、何らかのかた

ちや写真が残っているのではないかと思ひ、探すことも度々ありました。でも今となっては、このお手紙だけ…というのが私にとって何よりも心に響く大切な宝物であり、支えとなっています。

手紙にはもう一言「このことは、今からあなたにとって大きな力・喜びとなるでしょう」と書かれてありました。今は亡き恩師には、今日でも見守っていただき、時には強く背中を押していただいていると感じています。恩師も私も、そして世界中の数え切れない人も（同じような道を歩くことは到底できませんが、少しでもお近くに・・・）と、マザーの歩いてきた道を歩き、マザーの志であった『最も小さき人々に愛を捧ぐ』『小さき花になろうという精神』を持つようとしています。私も、この機会にもう一度心に留めておきたいと、思っております。

恵まれない沢山の人を助けられたマザー・テレサのあの優しい手、あの強い眼差し…私なんかがおこがましいことですが、マザーに抱かれた喜びと感謝の気持ちは、いつまでもいつまでも、消えることはありません。

私達正派音楽院二年生三名はこの度、先生方はじめ沢山の方々のお力添えの下、晴れて卒業演奏会に出演させて頂く運びとなりました。三人で共に二年間を過ごしてきた絆を演奏会に込められるよう、一生懸命頑張ります。年度末のお忙しい折かと存じますが、ご都合がございましたら是非お運び頂きたく、学生一同より、よろしくお願ひを申し上げます。

正派音楽院本科二年生一同

第51回 正派音楽院卒業演奏会

3月14日(水) 6時開演(5時30分開場)

ルーテル市ヶ谷センターホール

入場無料

TNBのそれっぽい話?

三味線演奏家 (<http://ameblo.jp/tnb-zz/>) 田辺 明

日常生活において何の気なしに聞こえてくる音楽に気を留めてみると、音楽的・楽典的にさまざまな発見があったり(なかつたり)します。

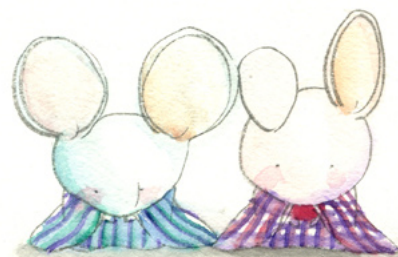
古典に限らず、色々な楽曲を演奏していると、「連符」というものが出てきます。3連符や7連符といった1拍をその数だけ等分したりリズムになる音符です。

一見難しそうですが、その音数の自分の好きな単語を当てはめれば結構楽しくなります。7連符だったら7音の単語に置き換えて考えます。例えば「レバニライタメ」とか「タツノオトシゴ」みたいに。某人間国宝の先生も、「アカサカミツケ(赤坂見附)」みたいに駅名に置き換えるようです。好きな人の名前、はたから見たらアブナイ感じになりそうですね。今回のテーマ「神の手」というと、私の小学校時代、当時ハドソンの一社員であった通称・高橋名人(高橋利幸)という方がいました。ファミコンの名人です。当時、ゲームのコントローラーに見立てたシューオッチという1秒間にどれだけボタンを連打できるかという玩具がありました。高橋名人はこれを当時16連打出来るという神業を持っていて、我々子供にとってはまさに神の存在でした。

これを音楽に置き換えると、4分音符=60の速さの1拍に16連符もしくは64分音符が16個ですね。音楽をやっている方は想像してみてください。実際に三味線でやってみましたが、神の領域でした。ですが、いつかは「田辺明の16連符」という神業が出来るといいですね。

邦楽英単語講座・その八：お辞儀

bow



Translated by noriko morikawa
Illustration : urara okuda

◎あとかぎ◎

二十年以上も前の事だから、記憶は確かではないが「アンナ・マグダレーナ・バッハの年代記」という1985年の映画の中に「右手は人から神への問いかけ、左手は神から人への答え」という台詞があった。この時代の鍵盤曲にはまだ左右の手の主従関係がなく対等で、その後の曲とは脳の使い方が違う。神経は脳の直前で交差しているため、左手を操っているのは右脳。右脳は直感的で神の領域。逆に左脳は、言葉を操る理性的な人の領域。バッハの時代はまだ、人と神の関係が近かったと言えるかもしれない。

映画ではバッハの役を、世界的なチェンバロ奏者、グスタフ・レオンハルトが演じていた。昨年、震災の影響で出演者のキャンセルが相次ぐ中、グスタフ・レオンハルトは5月末に日本にやってきてくれたが、年を越して今年一月十八日に亡くなってしまった。バッハ好きでなくても、前述の映画はDVDでぜひ観てほしい。

グラフィックデザイナー (<http://www.1938.jp/>) みやはらたかお